

保育内容（表現Ⅱ）における授業実践の考察

—指導者としての資質・能力の育成を目指して—

A study for class practice in childcare contents (expression II):
Aiming to develop qualities and abilities as leaders

井ノ口 和子¹⁾
Kazuko INOBUCHI

概要

本研究では、幼児期の表現（造形活動）に関わる立場の教員や保育士などを「指導者」とし、「指導者」としての資質・能力を育成するための具体的な方途を探る。本稿では、主に実践事例「へんしん」における学生の造形活動や振り返りシートへのコメントなどを考察した。その結果、指導者としての資質・能力を育成する授業実践として、以下の視点が重要であることを導いた。第一に学生の主体性の発揮、第二に環境や材料・用具の整備、第三に一人ひとりの思いや行為に寄り添った支援、第四に表現（造形活動）の記録と活用である。これらの視点は指導者としての「資質・能力」に共通するものであると考えられる。表現（造形活動）の意味や意義を「実感」として理解することができる実践的な学びを積み重ねていくことが、指導者としての資質・能力を育成するために重要である。

キーワード：表現（造形活動）、授業実践、指導者、資質能力

Abstract

In this study, teachers and nursery teachers who are involved in early childhood expressions (artistic activities) are defined “leaders”. The purpose of this study is to consider specific ways to develop qualities and abilities as “leaders”. In this paper, I considered student activities and comments mainly in the practice the “Henshin”. As a result, the following elements have been found that class practice is important for developing instructor qualities and abilities. The first is the student initiative, the second is the environment, maintenance of materials and tools, the third is support based on each person’s thoughts and actions, and the fourth is recording activities and utilizing recodes. These elements are thought to be common to the “qualities and abilities” of the leader. Aiming to develop the qualities and abilities of a leader, it is important to repeat practical learning that can be understood as the “true feeling” of the “meaning and significance” of artistic activities.

Keywords: expressions (artistic activities), practice, leaders, qualities and abilities

¹⁾ 共栄大学 教育学部

1. はじめに

本学では、幼稚園教諭一種免許状取得の要件である〈教育課程及び指導法に関する科目〉として保育内容の5領域に関する授業科目が設定されている。筆者は2018年後期に開講された保育内容（表現Ⅱ-1）の授業15回のうち、2回を担当し、本年度（2019）から保育内容（表現Ⅱ-1, 2）を単独で担当している。筆者は初等教員養成課程における図画工作に関する授業科目も担当している。小学校や初等教員養成における図画工作に関わる課題として指摘されているのが、図画工作に対する苦手意識である。本学で担当する授業においても、「好きだけど得意ではない」、「不器用だから図工は苦手」、「苦手だから指導に自信がない」などという学生の声を聞く機会が多かった。この実態は、自身の技能に関する苦手意識が造形表現そのものへの苦手意識や、指導者としての不安につながっていることを意味していると推察される。

この苦手意識の周辺には、図画工作の教科目的が正しく理解されず、上手な作品（絵）をつくる（描く）ことを目的として捉えてしまったり、完成作品の巧拙のみで学習評価をしてしまったりするなど多くの課題が存在する。2018年度に担当した2回の授業における学生の実態やシラバスに示された「保育内容(表現Ⅱ)」に関する授業内容から、初等教員養成における図画工作に関する課題が、幼児教育や保育における造形表現の現場でも共通しているのではないかという問題意識が生まれた。

1.1 問題の所在

街の書店やweb上には、幼児期の子どもの造形に関する多数の本やサイトを確認することができる。そこには、つくり方の手順がわかりやすくカラー写真で示され、簡単に「かわいらしい・幼児らしい作品」ができるような工夫の数々が紹介されている。ここで着目するのは、「誰がやっても」、「同じような」作品ができるということである。この場合、大人がつくらせたい作品のイメージをもとに、子どもたちに手順を指示し、作業工程を確認し、ていねいにつくらせることを造形活動と称している。こうした指導のよりの指導者には、大人が考える作品を、全ての幼児に上手に（それなりに）つくらせることが求められ、その「作品」が指導者にとっての成果であり、評価対象となる。幼児の表現（造形活動）の現場に並ぶ「まるで同じ作品」、大人が思う「幼児らしい、かわいらしい作品」の背後には、大人（指導者）にとっての安心感が潜んでいると推察されるのである。このような表現（造形活動）の現場には、一人ひとりの子どもの思考や行為という捉えは一切ない。すなわち、幼児教育における造形の現場には、大人の論理に拠る表現活動という図画工作・美術教育と共通する課題があると言わざるを得ない。

表1は、本学の2018年度の保育内容（表現Ⅱ-1, 2）のシラバスからまとめた15回の授業内容である（表現Ⅱ-2の第13, 14回の2回の授業はオムニバスで筆者が担当した）。表現Ⅱ-1では、4コマ漫画と絵本の作成という課題が主な授業内容となっている。表現Ⅱ-2では、引っ掻き絵（スクラッチ）、型押し（スタンピング、フロッタージュ）、吹きさらし（ドリッピング）、ちらし絵（コラージュ）などのモダンアートテクニックを用いた表現活動と、色や模様・形を楽しむ課題と厚紙や色（折り）紙を使った作品制作が課題となっている。二つの授業とも、学生は個人でスケッチブックを用意することとされ、そのスケッチブックに課題作品を制作し、最終回での合評会と教員による評価が設定されている。このシラバスから、保育内容（表現Ⅱ-1, 2）では、実技演習が主な学習活動となっていることがわかる。つまり、この授業で習得する指導者としての資質・能力は、幼児期の子どもの表現（造形活動）の現場において教材として活用できる作品の制作や技法の習得と指導方法であると位置付けられている。

しかし、提示された技法で作品をつくる造形表現だけで、指導者としての資質・能力を習得することが可能なのだろうか。幼児期の造形活動は、大人の論理に拠る作品づくりや大人の都合に合わせた掲示物をつくることではないはずである。子どもたちは、日々の生活や遊びの中で、いろいろなモノやコトと出会い、発見し、自らの世界を広げていく。幼稚園教諭や保育者養成の現場では、子どもたちの表現（造形活動）を豊かに支えるための資質・能力を育成することが求められているはずである。

表1 2018年度 保育内容（表現Ⅱ-1, 2）シラバスによる授業計画

回	保育内容（表現Ⅱ-1）	保育内容（表現Ⅱ-2）
1	オリエンテーション	オリエンテーション
2	表現理論（表現とは何か1）	幼稚園教育要領「表現」について
3	表現理論（表現とは何か2）	造形表現の指導
4	「私と表現」	幼稚園教育の表現指導
5	クレヨンによる風景スケッチ	画用紙（引っ掻き絵）
6	マンガ（4コマ漫画による日常生活）	画用紙（型押し絵）
7	マンガ（4コマ漫画による嬉・怒・哀・楽）	画用紙（吹きさらし絵）
8	マンガ（4コマ漫画による嬉・怒・哀・楽）	画用紙（ちらし絵）
9	絵本作成1 20コマの原画作成	厚紙（お面の制作）
10	絵本作成2 20コマの原画完成	厚紙（立体作品）
11	絵本作成3 20コマの下描き	色（折り）紙（花）
12	絵本作成4 下描き完成	色（折り）紙（生活空間）
13	絵本作成5 黒マジックで線画	身体と表現
14	絵本作成6 着彩	環境と表現
15	発表会と評価	合評会と作品評価

1.2 研究の目的と方法

本研究では、幼児期の子どもの表現（造形活動）に関わる立場の教員や保育士などを「指導者」とし、子どもの表現を育む指導者としての資質・能力の育成という視座から、「保育内容（表現Ⅱ）」での実践事例を分析・考察し、授業内容・展開のあり方を考察することを目的とする。本研究で取り上げるのは、2019年前期に筆者が担当した「保育内容（表現Ⅱ-2）」の授業である。

本稿では、本章に続き、2章では幼児の表現に関わる先行研究を検討し、3章では、「保育内容（表現Ⅱ-2）」の授業実践を具体的に示し、実践事例を分析・考察する。最後に、4章では、ここまでの結果と分析を受け、指導者としての資質・能力を育成するための「保育内容（表現Ⅱ）」の具体的な方途を探り、成果と課題をまとめる。

2. 先行研究の検討

本章では幼児の表現（造形活動）に関わる先行研究を検討し、本研究における分析・考察の視点を探る。幼児の表現（造形活動）に関わる研究として、幼稚園や保育園等における実践を記録する「エピソード記述」による研究や、幼稚園教諭・保育者等の指導者を育成する現場からの研究、海外の幼児・保育の現状に関する調査などが確認できる。それらの中から、本章では、第一に現在の幼児教育に大きな影響を与えていると考えられるレッジョ・エミリア・アプローチ、第二に、指導者育成の現場における教材や素材の開発に関わる研究、第三に幼児教育（保育）と小学校における図画工作とのつながりに関する研究を取り上げる。

2.1 レッジョ・エミリア・アプローチに関する先行研究

レッジョ・エミリアは、イタリアの都市である。レッジョ・エミリア・アプローチは、1991年にアメリカの週刊誌『ニューズウィーク』に、幼児教育における国際的なロールモデルとして取り上げられた。このアプローチでは、アートを主軸としたプロジェクトと呼ばれる活動やドキュメンテーションと呼ばれる記録などが特徴的である。

2011年に東京や京都などで開催された「驚くべき学びの世界展」によって日本に紹介されたことで、このアプローチは幼児教育や美術に関わる研究者や指導者に大きな影響を与えることとなる。ワタリウム美術館（東京都）で開催された展覧会の開催に合わせて発行された『驚くべき学びの世界 レッジョ・エミリアの幼児教育』を監修した佐藤（2011）は、この教育の特徴を「アートの創造的経験によって子どもの潜在的可能性を最大限に引き出しているところにある¹」と述べている。

伊東（2012）は保育実践における記録の重要性に着目し、アメリカのマサチューセッツ州ボストン市のレッジョ・エミリア・アプローチを実践する保育施設におけるドキュメンテーションの詳細を示し、その内容と作成方法を検討している²。川口・吉岡・竹内（2019）は、保育内容の指導法の実践における素材に着目し、受講学生が素材を実感的に理解するための方法としてレッジョ・エミリア・アプローチに依拠し、分析と考察を行なっている³。川口らは、レッジョ・エミリア教育の幼児教育実践例の中から紙の特性に着目した実践について考察している。

レッジョ・エミリア・アプローチの特徴は、それが造形教育に関するアプローチではなく、幼児教育そのものの主軸にアートを置いたところにある。したがって、大人が作らせたい作品を子どもに作らせるための教育とは一線を画している。プロジェクトと呼ばれる活動やドキュメンテーションと呼ばれる記録の取り方や活用の仕方は、保育内容（造形表現）の授業のあり方に大きな示唆を与えるものと考えられる。

2.2 保育内容（造形表現）の授業における教材や素材の開発に関する先行研究

幼児の造形教育の現場では、いろいろな材料、用具、技法が取り扱われる。例えば、画用紙や色（折り）紙などの造形材料や空き箱やペットボトルキャップのようなりサイクル材料、石や葉っぱなどの自然素材など多岐にわたっている。さらに、絵の具やペン、クレヨンなどの画材や糊やテープなどの接着剤など、使用される材料や用具も多種多様である。

教材や実践の開発に関する先行研究として、角田（2011, 2013）による「造形表現を高めるための創造的な教材開発による授業評価（その1, その2）⁴」、黒木（2019）による「幼児教育を学ぶ学生のための造形表現の教材について⁵」、昆（2018）による「領域『表現』における造形表現に関する一考察 —オイルパステルによる心の解放体験から—⁶」などがある。先に示した川口らによる研究も、和紙という素材に着目した実践事例の考察として位置付けることもできる。

これらの先行研究の基盤にあるのは、指導者としての豊かな材料体験の必要性である。指導者自らが材料・用具に関する豊かな知識と技能をもたなければ、指導者として表現（造形活動）の現場に立つことはできない。豊かな造形体験のもとで多様な材料や素材の知識と技能を習得することの必要性を示唆している。

2.3 小学校教育の図画工作とのつながりに関する先行研究

2017（平成29）年に幼稚園教育要領、保育所保育指針、幼保連携型認定こども園教育・保育要領が同時に改定された。改定の要点として、0歳から18歳までの子どもの育ちを見通し、それぞれの教育内容に整合性をもたせたことがあげられる。幼児教育において育みたい資質・能力は、小学校以降の学校教育において育成する資質・能力とつなげて理解する必要がある。それは、小学校以降の学校教育において育成される資質・能力の基礎が幼児期で培われるからである。

小学校学習指導要領の今回の改定では、育成する資質・能力を、知識及び技能、思考力・判断力・表現力等、豊かな学びに向かう力、人間性等の三つの柱で整理した。幼児教育では、この三つの柱と関連づけて、個別の知識や技能の基礎、思考力・判断力・表現力等の基礎、学びに向かう力、人間性等として示されている。この三つの柱をより具体化したものが、今回の幼稚園教育要領、保育所保育指針等の改定で示された幼児期の終わりまでに育ってほしい10の姿である。

幼（保）小のつながりを視点とした研究として、小橋・佐藤・楨（2019）は「幼少をつなぐ造形教育カリキュラムの研究Ⅱ —実態調査の結果と保小の比較—⁷」、松下（2018）による「幼児の領域（表現）と小学校課程（図

画工作科および生活科)との相関について「学習指導要領に見る造形分野の於ける指導法の関連を探る⁸⁾」などがある。先に述べたように、本稿の問題意識として、図画工作と幼児教育における造形表現の現場とに共通する課題があると考えている。幼(保)小のつながりを視点とする研究は、筆者と共通する問題意識を示すものとして位置付けられる。

3. 実践事例「へーんしん」

本研究で取り上げるのは、2019年前期に開講された「保育内容（表現Ⅱ－2）」の授業であり、この科目を履修しているのは、「保育内容（表現Ⅱ－1）」の単位を取得済みの学生である。筆者は、「初等図画工作Ⅰ・Ⅱ」（1年次）、同時期に「初等教科教育法（図画工作）」（3年次前期）の授業も担当していた。「初等図画工作Ⅰ」を受講する1年次4月の時点では、受講する多くの学生に図画工作への苦手意識が確認された。また、学生が受けてきた図画工作の授業は、絵や工作の内容に偏った授業内容であり、造形遊びや鑑賞活動の体験が圧倒的に不足している実態があった。そこで、「初等図画工作Ⅰ・Ⅱ」の授業では、造形遊びや多様な鑑賞活動などを授業内容に取り入れることで、図画工作は表現や鑑賞そのものを学ぶのではなく、表現および鑑賞の活動を通しての学びであることを理解させることを企図し、実践してきた。「保育内容（表現Ⅱ－2）」の授業と同時期に履修している「初等教科教育法（図画工作）」の授業においても、上手な作品（絵）をつくら（描か）せるための指導ではなく、一人ひとりの子どもの学びに寄り添った指導のあり方を身につけさせようと企図した授業展開をしてきた。

したがって、受講学生は上手な作品（絵）をつくる（描く）ことが造形表現の目的ではないことへのある程度理解はあるが、それはまだ知識としての理解であり、実感としての理解には至っていないと考えられた。また、先述したように2年次で受講した「保育内容（表現Ⅱ－1）」の授業では主に与えられた課題をこなす学習活動を経験してきた。したがって、幼稚園や保育園の現場に立った時に役立つ作品制作の技能を身につけることを本授業の学習内容と捉えていることが想定された。また、小学校における図画工作とのつながりを意識することもなく、それぞれを切り離して捉えているとも想定された。

3.1 授業の概要

「保育内容（表現Ⅱ－2）」の受講者は3年次生の23名（男子9名、女子14名）である。表2は全15回の授業内容をまとめたものである。本授業は第1回（オリエンテーションを含む）から3回目までと、4～14回目までのグループアクティビティに分かれて構成した。グループアクティビティの題材は、「へーんしん」と「お店やさんごっこ」の2つである。先の「へーんしん」の題材で様々な材料と用具を扱う体験や、身体全部を使った表現を楽しませ、次の「お店やさんごっこ」につなげる授業計画とした。

表1 2018年度 保育内容（表現Ⅱ－1, 2）シラバスによる授業計画

回	授業内容	進め方
1	オリエンテーション	授業の進め方、幼児の造形表現とは
2・3	幼児の造形表現・指導者の役割①	講義、グループディスカッション
4～6	へーんしん	グループアクティビティ
7	ドキュメンテーションまとめ	グループアクティビティ
8	ドキュメンテーション、発表会	全体
9～13	お店やさんごっこ	グループアクティビティ
14	商店街フェスティバル	全体
15	授業のまとめ	全体

3.2 幼児の造形表現・指導者の役割についての演習（第1～3回目授業）

第1回から3回目までの授業は造形活動を行わず、グループディスカッションの方法などを活用し、幼児期の子どもの表現（造形活動）の理論や本授業の到達目標の正しい理解を促すことを企図した授業内容とした。

(1) 授業の概要と実際

- ①オリエンテーション後に雑誌『美育ポケット¹⁾』（写真1）を活用し、現時点で自分が思い浮かべている幼児期の表現（造形活動）の現場と『美育文化』に掲載されている実践や写真から読み取る表現（造形活動）現場との相違を明らかにさせた。その相違点を付箋に記入させ提出させた。
- ②任意にグループを作成し、前回記入した付箋を基に、自分が考えていた幼児表現の現場と『美育文化』から読み取る現場との違いについてディスカッションをさせ、その内容を記録させた（写真2）。次に、各グループのシェアタイムを設定し、各自が幼児の表現（造形活動）の指導に関するキーワードを一つ設定し、発表した。
- ③前回に発表したキーワードを授業者（筆者）が分類し、作成した資料（写真3）を基に、自分たちの幼児の表現（造形活動）の現状を踏まえ、幼児の表現（造形活動）を学ぶ視点を確認した。

(2) 考察

写真3は、23名の学生がそれぞれ一つずつ出したキーワードである。そのキーワードを分類すると、子どもの表現（造形活動）を指導するには、考える、見つける、工夫するなどの行為・活動が、子ども一人ひとりの主体性を大切にすることにつながり、素材や道具・材料を豊かな環境を整え、子どもたちの感覚や気持ちを大切にしたいと教育・保育を目指したいと考えている、と整理された。

この3回の授業を通し、学生は、何かをつくらせることが幼児期の子どもの表現（造形活動）の目的ではないことを改めて理解したと考えられる。さらに、豊かに自然や材料と関わらせ、「あったかいね」、「きもちいい」、「ふわふわしてる」など子どもたちの身体感覚を十分に働かせることで、「やってみたい」、「いいこと考えた」などの子どもからの思いや行為を引き出すことが指導者の役割の一つであることを理解したと推察される。

3.3 「へんしん」の演習（第4～8回目授業）

4回目以降の題材として「へんしん」を設定した。工作室にある多様な材料・用具を使い、自らが何かに変身する活動、記録の作成、発表（シェアタイム）までの5回計画である。

幼児期の子どもたちは「変身ごっこ」が大好きである。身を飾るグッズや身にまとう衣装などであっという間に身近なキャラクターや憧れのヒーローに変身する。この「変身ごっこ」の遊びをヒントにし、本題材を設定した。この題材は、多様な材料体験と技能の習得とともに、自らが変身することで学生の心と身体を解放し、造形表現の楽しさの実感を得ることを企図したものである。

(1) 活動の概要と実際

任意の5グループ（男子2、女子3グループ）に分かれて活動をした。画用紙・色画用紙、カラービニール袋、スズランテープ、ダンボールなどの材料、ハサミ、カッターなどの用具を準備し、それ以外の工作室にある材料や用具は自由に使用してもいいことを伝えた。授業は主に活動に充てる時間として3回、活動記録をまとめる活動に1回、発表とディスカッションに1回である。

(2) 結果と考察

1回目の授業の際は色画用紙やカラービニール袋を使用する活動が多く確認された（写真4-1, 2, 3）。ビニール袋は、身体に巻き付けたり、被ったりすることができる大きさである。また、多色のビニール袋を用意したことから、自分が変身したいものに合わせて色を選んだり、色からイメージを思い付いたりしていた。

2回目以降の授業では、材料の色や形に着目し、自分の変身したいイメージに合わせた材料を選択する様

子が確認できた。女子学生（写真5-1）は、黒色のビニール袋の横の部分の部分を楕円型に切り抜き、そこから顔を出し、袋の底辺部分の尖った角を活用し、〈白雪姫の魔女〉に扮している。ビニール袋の黒色と赤の色画用紙で作成したりんごとの対比が鮮やかである。ディズニー映画のプリンセス〈ラプンツェル〉に変身しようとする女子学生（写真5-2）は、ピンク色のビニール袋をドレスに見立て、黄色のスズランテープを三つ編みにして頭部に付けようとしている。活動では、グループ内の友だちが協力し合う場面も確認できた。工作室にある紙皿を見つけた男子学生（写真5-3）は丸い皿状の形から〈カップ〉を想起し、切り込みを入れて頭部のお皿を作成し、半分に折り黄色に着色した紙皿をくちばし（あるいは唇）に見立てている。

身体を活用した活動も確認することができた。男子学生（写真6-1, 2）は〈タピオカドリンク〉に変身しようと思いつき、段ボールを筒状に丸め、それをすっぽりかぶり、カップに見立てた。さらに自分の右手を高く上げ、ストローを表現しようとしていた。黄色いビニール袋を被り、腰の部分に黒い画用紙で作成した帯状のものを巻いた女子学生（写真7）は、床にうずくまり、身体を丸め、〈玉子焼きのお寿司〉に変身している。

次に、変身のテーマについて着目する。テーマ設定については、『三びきの子ぶた』（写真8）、『白雪姫』（写真9）などのストーリーをグループテーマとし、メンバーに役割を与えて変身するグループと、統一のテーマは設定せずに、各自が〈ラプンツェル〉（写真10）、〈ミッキーマウス〉（写真11）などに自由に変身するグループに分かれた。写真11の女子学生は、前述した〈玉子焼きのお寿司（前掲、写真7）〉と同一人物である。彼女は次々にいろいろなモノに変身し、友だちに撮影してもらった活動を繰り返していた。男子5名のグループ（写真12）も統一のテーマを設定せずに、それぞれが〈エビフライ〉、〈タピオカドリンク〉、〈乳酸飲料〉、〈時計〉、〈信号機〉に変身している。後日の発表の場面では、変身した理由についてコメントしていた（信号機に変身した学生は、「毎朝、僕をストップさせて遅刻させようとする、〈困った信号機〉に変身しようと思った」とコメントしていた）。このコメントから、自分の生活の中から変身するテーマを想起していることがわかる。

最後に活動の記録について考察する。3回の授業では、最終的にまとめる記録（掲示物）の資料として活用するため、各自のスマートフォンによる写真の記録やメモを残すことを学生に課した。記録（掲示物）を作成する際に具体的に指示したことは、笑顔の写真を取り入れること、グループのメンバー全員の写真があること（特定のメンバーに偏らないこと）、活動経過がわかるようにすることである。この指導の観点は、幼稚園や保育園で指導者として勤務することを想定し、記録（掲示物）を作成する際に重要であると授業者（筆者）が判断したからである。学生が制作した記録（掲示物）からは、具体的な材料や活動の経過がわかるような内容、活動中に感じたことが伝わるコメント、色を使った視覚的な効果などの工夫が確認された（写真13-1, 2, 3, 4）。多くの授業において、学生が活動を振り返る手段としてレポートやリフレクションシートが多く活用されている。それらの多くは文章を中心とした記録である。本実践のように写真記録を活用したり、カラーペンや色画用紙などを使って視覚的な効果を考えたりする記録のまとめは、学生にとって初めての記録の方法であった。活動を振り返り、記録に残すことは、表現（造形活動）の意味や意義について思考する緒となる。活動と合わせて、記録の取り方と活用が指導者としての資質・能力の育成の一つの具体的な方途となり得ると推察される。

3.4 授業の振り返りシートへの記述

授業後に記述させた振り返りシートへの記述内容から、この題材における学生の学びを考察する。記入された内容は、第一に材料や用具などの環境整備、第二に指導者（ここでは授業者である筆者）の具体的な支援と活動との関連、第三にイメージ・テーマの想起、第四に記録・プレゼンテーションについて、の四つに分類された。以下に、振り返りシートへの記述を抜粋し、考察する。

(1) 材料や用具などの環境整備

- ・袋をドレスに見立て、首や腕を通せるようにしたり、スカートのように腰に巻き付けたりしていた。紙

皿でお面を作りキャラクターになりきったり、画用紙でエプロンを作ったりしている子もいた。子どもたちも場や材料が豊富であればたくさんの楽しい変身を遂げられることができると感じた。

- ・たくさん考えることができるのは、たくさんの材料があることであると感じた。普段からの材料集めが大切だと思った。
- ・「不要だな」と思うようなものでも使うことができた。端切れや、短くなってしまった毛糸、ゴミ袋など、「画用紙で作る」という固定概念にとらわれないようにすることが必要であると思った。友だちが違う素材のものを使っていて、「俺も！」という形で、工夫の輪が広がった。
- ・危険なカッターなどは、作業するスペースがあって、先生が見ていてくれた。安心してできた。

(2) 指導者（ここでは授業者である筆者）の具体的な支援と活動との関連

- ・「これ、なんだと思う？」と先生に聞いたときに、自分のやろうとしていることをあててくれたことが嬉しかった。自信をもってその後の活動ができた。
- ・「こんなものがあるよ」、「〇〇したいなら、これを使ってみようか」とヒントをくれた。自分では思いつかなかったので、こういう支援は大事だと思った。
- ・とにかく否定しない。先生も楽しそうにずっと笑顔でいてくれた。
- ・頭の中で「こうしたい」があるのにできないとき、先生がナイスタイミングで声をかけてくれると、「こうしたい」に一歩近づくことができた。

(3) イメージ、テーマの想起

- ・私のグループは一人一人が「なりたい」ものに変身していたけど、他のグループはみんなで話し合ってテーマを決めていた。そんな発想の仕方もあるんだと驚いた。
- ・最初は大好きなプーさんになろうと思った。プーさんになってみたら色合いが玉子焼きみたいだと思った。だから、次は玉子焼きのお寿司になってみた。ひとつやったら次、その次と、なりたいものが浮かんできた。
- ・自分は好きなキャラクター（人間の形）に変身することしか思い浮かばなかったけど、自分が好きな食べ物や飲みもの、エビフライや時計などに変身していいんだってびっくりした。
- ・ただ座って頭で考えていても思いつかなかったけど、手を動かして、何かを始めたら、次々浮かんできて不思議だった。

(4) 記録、プレゼンテーション

- ・紙にまとめるだけでなく、ダンボールやビニール袋にまとめるのもありなんだ。
- ・まとめること、記録することで自分たちの活動の意味や学びを意識することができた。
- ・こんな記録が園に掲示されていたら、保護者はうれしいだろうと思った。手書きでアナログも味があっていいもんだ。
- ・活動の内容を記録することは、指導者としてとても重要だと思った。保護者にも示すことができるし、自分たちの振り返りもできるし、次の活動に生かすこともできた。

第一に分類した「材料や用具などの環境整備」では、工作室の材料や用具を自由に使うことで、変身したいモノやコトについての発想が想起したり、表現の工夫が生まれたりしたことに着目している。また、材料の色や形・その特徴などから発想の想起を促したり、工夫が生まれたりすることに対する気付きも記述されている。

第二に分類した「指導者（ここでは授業者である筆者）の具体的な支援と活動との関連」については、つくるための手順の指示ではなく、材料や用具の提示、技能のアドバイスなどを適切なタイミングで行うことの重要性についての気付きが記述されている。適切なタイミングの助言は、一人ひとりの活動に寄り添っていなければ不可能なことである。記述に見られた指導者の共感的態度と合わせて、子どもの造形活動に寄り添う指導者の態度に対する気付きがあったと考えられる。

第三に分類した「イメージ、テーマの想起」については、テーマの多様性や発想の想起・広がりのおかげとなることについて記述されている。表現（造形活動）では、何かつくりたいものをイメージしてからつくるだけではなく、材料との関わりや友だちとの関わり、行為から新しい発想が想起したりする。すなわち、表現（造形活動）は、決めてからつくるだけではなく、つくり・つくりかえるものでもあることの理解につながる記述である。

第四に分類した「記録、プレゼンテーション」は、学生にとって新しい学びの発見であった。記録をすることで活動を振り返ったり、活動の意味を探ったり、活動の楽しさなどを共有できることを感じとっている。また、単に写真を撮影したり、文字をデータ化して記録するデジタル記録ではなく、切ったり・貼ったりしながらアナログで記録を作成することで、何を・どのように残すのかを自由な視点で考えることができた。また、造形活動を行いながら同時に記録することで、場や空間の臨場感を盛り込むことができたと考えられる。

4. 考察と結論

本授業では、まず、美術教育の視点から幼児期の子どもの表現（造形活動）を捉えた実践教育雑誌に掲載されている実践の様子を示すことで、幼児教育・保育の現場における子どもの表現（造形活動）とその指導のあり方に対する自身の認識の現状を確認させた。それは、大人にとっての安心感や、大人が思う「幼児らしい、かわいらしい作品」や「まるで同じ作品」を生み出す幼稚園や保育園などの造形の現場に対する問題提起を企図したからである。大人がつけさせたい作品のイメージをもとに、子どもたちに手順を指示し、作業工程を確認し、ていねいにつくらせる造形教育の現状に対する問題意識は、1年次の授業「初等図画工作」でも学生に繰り返し示してきた。「作品主義」と呼ばれる図画工作への問題意識と同様の課題が、幼児教育においても存在することを学生が理解することが、本授業の基本的な態度として必要である。

次に、指導者として必要な資質・能力を習得する基盤として必要なのは、表現（造形活動）の意味や意義を、体験として実感することであると考え、「へんしん」の題材を設定した。本題材を設定するに際して、以下のことに配慮した。第一に、「変身しよう」と活動を示し、具体的なテーマや材料、方法などは学生の主体性に委ねたことである。何に、どうやって変身するのかを、材料を触ったり、材料を加工したり、あるいは友だちとのコミュニケーション活動を通して試行してほしいと考えた。第二に、材料や用具として、ビニール袋や画用紙、毛糸など多様な材料を事前に準備した。また、色や大きさ、形状などが多岐にわたるよう考慮したことに加え、段ボール箱やペットボトルキャップなどのリサイクル材料も準備した。これらの材料を事前に用意し、学生の目に見えるところに配置し、自由に使える環境設定をしたことで、学生の発想が想起したり、広がったりする。第三に、学生への共感的な態度による指導・支援である。学生の制作する場と時間を指導者（筆者）が共有し、学生の造形活動に寄り添うことで、認めてほしい・具体的な支援がほしいなどと思っている学生に対して適時な指導・支援が可能となった。第四に、活動を記録させたことである。活動を記録すること、記録をまとめることは、自分たちの活動を客観的な視野から考える緒となった。また、様々な記録方法のバリエーションを知ることにより、それぞれの特徴を考えることができた。

第2章（4）で述べた学生の振り返りシートへの記述には、先に示した四つの分類とは別に、「楽しかった」という感想が確認された。3人の記述を以下に抜粋する。

- ・初めての活動で手探りから始めたが、やってみたらとても楽しくて授業が楽しみになった。
- ・図工の授業は苦手だと思っていたけど、この活動はとても楽しくできた。
- ・自分の幼稚園の記憶ではつくるものが決められていて、その工程や使い道まで全て決まっていた。そのこと自体が間違いだとは言わないが、今回の活動は素直に「楽しかった」。なぜ楽しかったのかを考え

てみると、「私の『好き』」が入る余地があったからだと思う。

抜粋した最後の記述にある「私の『好き』が入る余地」という表記に着目する。この材料で、こうやってとつくるモノやコトを指示されれば、全員がある程度のレベルに達した作品が完成する。しかし、そのような大人がつけたいものを指示通りにつくる活動と、本事例での活動では、表現（造形活動）としての意味や意義が異なっている。「私の好き」が入ることが許されている活動こそが、表現活動であると言えるのではないだろうか。このような場と空間、機会を作り出すことが指導者としての資質・能力の一つである。

ここまでの考察から、指導者としての資質・能力を育成する授業実践として、以下の視点が重要であることを導いた。第一に学生の主体性の発揮、第二に環境や材料・用具の整備、第三に一人ひとりの思いや行為に寄り添った支援、第四に表現（造形活動）の記録と活用である。これらの授業実践の視点は指導者としての資質・能力に共通するものであると考えられる。つまり、幼児期の子どもの表現（造形活動）を支える指導者としての資質・能力を育成するための授業構想には、指導者としての資質・能力を具体的に授業方法として設定した授業実践が有効であるということである。

学生が、表現（造形表現）の意味や意義を実感として理解することができる実践的な学びを積み重ねていくことが、指導者としての資質・能力を育成するために重要である。実践事例「へーんしん」において学生が感じ取った表現することの楽しさ、寄り添い、認めてもらえる安心感、豊かな材料と自由な活動は、学生が記述した表現の一部を借りるなら「私の『好き』が入る余地がある」ことである。すなわち、指導者としての資質・能力の育成を目指す授業実践には、「私」が認めてもらえる場があり、安心して「私」のままでいられることが必要になってくる。

本研究では2019年度前期に開講した「保育内容（表現Ⅱ-2）」の事例を考察してきた。本授業では「へーんしん」の実践後に「お店やさんごっこ」をテーマとした実践を行なった。今後は、この「お店やさんごっこ」の実践の考察とともに、これらふたつの事例の関連について考察が課題である。



写真1 雑誌『美育文化』



写真2-1, 2 付箋を基にしたグループディスカッションの記録

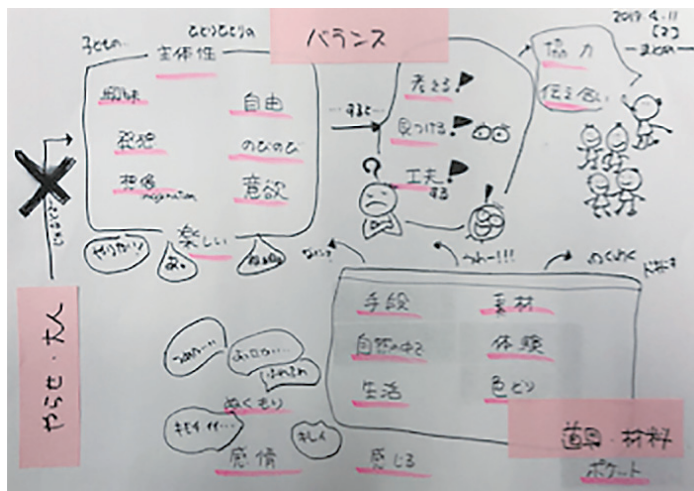


写真3 キーワードを分類した資料（筆者作成）



写真4-1, 2, 3 カラービニール袋を用いた活動



写真5-1, 2, 3 色や形に着目した活動



写真6-1, 2 身体を活用した活動 (その1)

写真7 身体を活用した活動 (その2)



写真8 「三匹の子ぶた」より



写真9 「白雪姫」より



写真10 「ラプンツェル」



写真11 「ミッキーマウス」



写真12 「エビフライ」, 「タピオカドリンク」,
「乳酸飲料」, 「時計」, 「信号機」



写真13 - 1, 2, 3, 4 「活動の記録」

注

- ¹⁾ 『美育文化ポケット』は幼児と小学校低学年に向けて美術を通してこどもの健やかな成長を育む実践教育雑誌である(季刊発行)。編集統括責任を大橋功(岡山大学)が担当している。授業時には2016年夏12号から21号までを用意した。

引用・参考文献

- ¹ 佐藤学 監修, 「驚くべき学びの世界 レッジョ・エミリアの幼児教育」ワタリウム美術館, 2011, p8
- ² 伊東久実, 「レッジョ・アプローチによるドキュメンテーションの実例検討」, 「見延論叢」17号, 身延山大学仏教学会, 2012, pp.1-17
- ³ 川口菜々子・吉岡千尋・竹内晋平, 「素材を実感的に理解することを意図した『幼児の造形表現(保育内容の指導法)』の実践—和紙と水糊による「Dried drawing」の体験を中心に—」, 「次世代教員養成センター研究紀要」5号, 2019, pp.123-130
- ⁴ 角田みどり, 「造形表現を高めるための創造的な教材開発による授業評価(その1)」中国学園紀要, 10号, 2011, pp.179-190・「造形表現を高めるための創造的な教材開発による授業評価(その2)」中国学園紀要, 12号, 2013, pp.69-81
- ⁵ 黒木重雄, 「幼児教育を学ぶ学生のための造形表現の教材について1」, 西南大学人間科学論集, 第14巻第2号, 2019, pp.239-253
- ⁶ 昆正子, 「領域『表現』における造形表現に関する一考察」, 長崎女子短期大学紀要, 第42号, 2018, pp.151-158
- ⁷ 小橋暁子・佐藤真帆・楨英子, 「幼少をつなぐ造形教育カリキュラムの研究Ⅱ—実態調査の結果と保小の比較—」, 千葉大学教育学部研究紀要, 第67巻, 2019, pp.395-400
- ⁸ 松下明生, 「幼児の領域(表現)と小学校課程(図画工作科および生活科)との相関について—学習指導要領に見る造形分野の於ける指導法の関連を探る—」, 柳城こども学研究, 第1号, 2018, pp.15-29